

# 無縁社会を見据えて

佐々木保雄

2010年7月30日に、長寿社会・高齢者社会の裏側にあつて、見えてこなかつた事件が日本全土に衝撃を与えました。東京都の足立区で、生存していれば111歳の男性高齢者が、ミイラ化して発見されました。30年も前に死亡していたのだが、家人はそれを隠して年金を不正に受給していたのです。

この事件の発覚後に、100歳以上の高齢者の行方が不明という事象が続々と発生し、社会問題となりました。そして、NHKが全国の市町村への調査を行った結果、「身元不明の自殺」や「行き倒れ」、「飢餓」や「凍死」が年間3万2000人にのぼることが明らかになりました。ごく当たり前の生活をしてきた人が、一人また一人と、社会、家族、親族とのつながりを失い、ひとり孤独に生きて、亡くなって行くのです。

この問題をNHKは、2010年1月31日にテレビで「無縁社会——無縁死32000人の衝撃——」というタイトルで放送しました。この番組は大きな反響を呼び、「無縁社会」という用語が強烈な印象を与えました。「孤独死」の数がこれだけ多くいるということは、他人とのつながりがなく生活している人々が急増していることを意味します。

家族の姿は大きく様変わりしています。今、私たちが生きている社会は、地域社会の絆も薄れ、家族の中でさえ孤立しがちな「孤独」の国なのです。

とりわけ高齢化や貧困、失職によって孤立化していく人たち。そんな人々を「孤族」と呼び、「家族」から「孤族」へと変わりつつある日本社会を、朝日新聞が2011年1月から「孤族の国」と題したシリーズで取り上げ、この問題をいろいろな事例から光をあてて論じました。

その中で取り上げられていた、2010年に20歳の兄が自殺した東京都の高校3年生の女性の発言が、この問題の本質に光を当てているように思えました。彼女は次のように記しております。

「両親が離婚し、兄は父方に、私は母方で暮らしていました。父はアルコール依存症で、兄に暴力的でした。兄は孤独だったんじゃないかと思います。不登校になって、中学卒業後は高校も行かず、就職も難しく、アルバイトにも雇ってもらえず、履歴書にうその学歴を書いてやっと働くところが見つかりました。大検を通過して大学に入ることになり、兄がこちらの家（母親）で一緒に生活するようになって、ギャップを感じていたんでしょう。誰からも愛されていないと感じていたと思います。母にも最後まで甘えることができません

んでした。兄は遺書の中で、こう言いました。『ホームレスのように葬ってください』と。帰る家があったはずなのに、自分には居場所がないと思っていたのでしょうか。今思うと、何かしてあげることが、できたんじゃないかと悔しいです。」

私は一連のこれらの記事を読みながら、ヨハネの福音書19章23～27節の光景が強く胸に迫ってきたのです。主イエスが十字架の死を目の前にして、母マリヤをヨハネに託したというあの出来事です。ヨハネはその福音書の中で、自分のことを「イエスが愛しておられた者が」（13章23節）、「愛する弟子」（19章26節）、「イエスが愛されたもうひとりの弟子」（20章2節）、「イエスの愛されたあの弟子が」（21章7節）等、と語っているのです。ヨハネは、自分はイエスから「愛された者」であるという思いを強く持っておりまして。この特別な思いを持って主イエスに従っておりました。これは主イエスが特別ヨハネだけを愛したというわけではありません。

言うまでもなく、主イエスはこの世を去って父のみもとに行くべき時が来たことを知った時、「世にいる自分のものを愛されたイエスは、その愛を残すところなく示された」（13章1節）と、ヨハネは自らその事を書き残していますから、主イエスは平等に弟子たちの全てを愛したのです。そうしますと重要なことは、ヨハネはか誰よりも自分は主に強く愛されていると受け止め、主にお従いしていたということです。主に深くお応えし、その絆を強く、親しく結んでいたヨハネの姿勢は、主イエスに対するヨハネの行動に見ることができます。

（1）最後の晩餐の時、「イエスが愛しておられた者が、イエスの右側で席に着いていた。」

（13章2節）

（2）復活の証人として「イエスが愛された、もうひとりの弟子が、ペテロよりも速かったので、先に墓に着いた。」（20章4節）

（3）復活された主イエスを、ペテロに先んじて認めた。「イエスの愛されたあの弟子がペテロに言った。『主です。』」（21章7節）

このようにして、誰よりも主イエスとの愛と信頼に満ちた関係を作り上げていったヨハネに、主イエスは「そこにあなたの母がいます。」と言われて、十字架の上から自分の亡き後の母マリヤを、愛する弟子ヨハネに託すのです。身内、血族、親族ではなく、主イエスの愛の継承者と言うべき、愛弟子ヨハネに委ねられたのです。

ここに新しい母と子という関係が生まれたのです。「この弟子は彼女を自分の家に引き取った。」（19章27節）のです。

「自分の家」、それは「自分のふるさと」、「帰るべきところ」と読むことができます。とするならば、マリヤは帰るべきところに帰ってきたのです。神の家族という居場所に帰っ

てきたのです。それはある意味で、教会の誕生と言うべき出来事であります。主の愛の中で、まさしく、新しい人間関係が生まれたのです。教会では、血縁、性別、年齢、人種、国籍、階級、職業に関係なく、主イエスに愛された者として、自分たちを神の家族と呼び、互いに兄弟姉妹と呼び合うのです。

このような教会の姿を現代社会は求めています。現代社会は教会のようになりたいのです。国立社会保障・人口問題研究所は、現在の結婚世帯形成の傾向が続いた場合、「2030年の日本の姿」は、50代・60代男性のおおむね4人に1人がひとり暮らしとなると予測しております。そのために、(1) 社会保障を拡充してひとり暮らしの人でも安心して生活できる社会の構築、(2) 社会とのつながりの確保があげられております。その接点となる地域コミュニティの強化が必要とされ、その実現に向けての模索が続けられております。

まさに、現代社会は、神の家族のような愛の絆で結ばれた「有縁社会」を求めて、産みの苦しみをしているのです。ここに、教会の交わりに生きる私たちキリスト者の存在が重要な意味を持ってきます。私たちは、キリストの体なる教会が現代社会に在って、果たす役割をしっかりと受けとめ、その使命に生きる者としての教会の交わりを大切にしたいと思う人々になろうではありませんか。

そのために、あのヨハネのように、主イエスに愛されているという充足感を持ち、更に、主イエスの愛の深さを日々の生活の中で味わい続ける中で、主イエスと絆を強く結ぶ者でありたいと思います。

(日本長老教会・守山キリスト教会牧師)

